

の用途が考えられた。また断面観察での遺構面の切合関係から、遺構の年代の新旧について、SK01-3→6→2→1、SK01-5→4→2→1（3・6と4・5の関係は不明）の関係が推測されていた。本研究ではSK01-2とSK01-6を除く4基の遺構を調査した。

遺構SK14は土師器焼成坑と考えられたが、床面に炭化物や焼上りが厚さ1.2cm堆積しているものの被熱の痕跡は顕著ではなかった。覆土からは生焼けに近い土師器片も出土していた。

以上の各遺構から5-8個の試料を北押川C遺跡と同様の方法で採取した。焼上遺構では操業時期の推定が目的であったが、粘土探査坑と推測される遺構SK01-3～5では、残留磁化から燃焼度を検討することにした。焼成の痕跡が無ければ、粘土探査坑または一般的な土坑との現地観察の根拠となり、逆に燃焼の痕跡があれば土師器焼成坑の可能性を指摘できると期待された。

D 北押川C遺跡における研究結果

第59図の下と第62図に交流消磁実験の結果を示している。各遺構の多くの試料では、図の例の様に二次磁化は低い消磁段階で消え焼成時の磁化が得られた。残留磁化的強度は、大体 $5 \times 10^{-3} \text{ Am}^2/\text{kg}$ から $2 \times 10^{-2} \text{ Am}^2/\text{kg}$ の範囲にあり、焼土の残留磁化と見なせた。第29表に各遺構の残留磁化的平均方向（偏角、伏角）、磁化強度（消磁前）および帶磁率を示している。

各遺構について、平均の磁化方向と α_{95} 角度を拡大シユミットネットに示し、地磁気年代はAD980年もしくはAD750年と推測された。

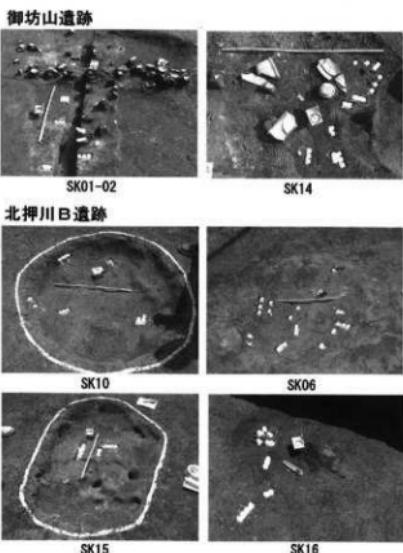
(1) 遺構SK06では α_{95} 角度は2.1度と集中した磁化方向を示し、地磁気年代はAD980年もしくはAD750年と推測された。

(2) 遺構SK10では α_{95} 角度は1.7度で、地磁気年代はAD1000年もしくはAD740年と推測された。

(3) 遺構SK15では α_{95} 角度は2.1度で、地磁気年代はAD990年もしくはAD750年と推測された。

(4) 遺構SK16では α_{95} 角度は1.7度で、地磁気年代はAD970年もしくはAD750年と推測された。

以上の様に4基の焼壁土坑の地磁気年代は、8世紀前半から中頃もしくは10世紀後半から11世紀初めの年代が推定された。考古学的研究も参照すると8世紀前半から中頃の年代の可能性が高いと考えられる。SK16の炭化材のC14補正年代がBP 1,353年（AD600年頃となる）と求められている（第V章第1節）。地磁気年代はC14補正年代より1世紀ほど新しい。



第62図 試料の採取風景

E 御坊山遺跡における研究結果

第62図の下に交流消磁実験の結果を示している。遺構SK01-1とSK14の試料は比較的安定な磁化方向を示し、図の例の様に低い消磁段階で二次磁化を除去できた。SK01のその他の遺構の試料の磁化は弱くあまり安定と言えないものが多かった。第29表に、各遺構の残留磁化の測定結果をまとめている。

1) 残留磁化強度

まず、残留磁化の強度を検討した結果、以下のことがわかった。

- (1) 遺構SK01の窓みを利用し隣接して構築された4基（SK01-1および3～5）の土坑では、採取試料の平均の磁化強度(Am^2/kg)の値は、SK01-1は 1.90×10^{-2} SK01-3は 6.58×10^{-4} 、

SK01-4は 9.19×10^{-4} 、SK01-5は 5.35×10^{-3} と求まり、遺構SK01-1は他より2桁強い磁化を持っていた。この結果は、現地調査と良く合い、SK01-1は土器焼成坑であり、その他の3基は粘土探査坑の用途が考えられる。

- (2) 遺構SK14については、磁化強度は $1.4 \times 10^{-3} \text{ Am}^2/\text{kg}$ とSK01-1と比べても1桁弱く、焼上としては弱い磁化である。現地調査による“土器焼成坑と考えられたが床面に炭化物や焼土が厚さ1.2cm堆積しているものの被熱の痕跡は顕著ではなかった。また覆土から生焼けに近い上部器片も出土した”的観察と調和的であり、被熱の影響はあるものの弱い焼成と考えられた。

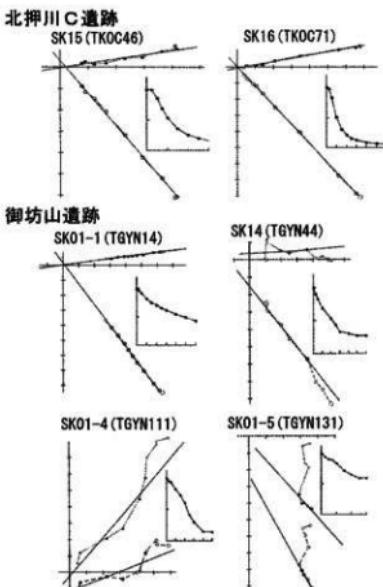
2) 地磁気年代推定

各遺構について、平均の磁化方向と α_{95} の範囲を拡大シミュットネットに示し北陸版地磁気変動との対比した（第64図）。

- (1) SK01-1では α_{95} 角度は2.0度となり、磁化の集中度と先述の磁化強度より、

遺構名	試料数	遺構の性格	偏角 (度)	欠角 (度)	磁化強度 (Am^2/kg)	α_{95} (度)	K	帶磁率 (A/m)
<北押川C>								
SK06	11	焼土土坑	-8.8	63.4	7.93E-03	2.1	465	53
SK10	10	焼土土坑	10.9	55.7	1.36E-02	1.7	792	52
SK15	7	焼土土坑	-6.9	58	6.92E-03	2.1	818	62
SK16	16	焼土土坑	-10.9	53.9	2.38E-02	1.7	518	65
<御坊山>								
SK01-1	16	土器焼成坑	7.9	52.7	1.90E-02	2.0	339	27
SK01-3	13	粘土探査坑	-21.2	49	6.58E-04	38.1	2	8
SK01-4	8	粘土探査坑	-64.4	51.9	9.19E-04	54.2	3	6
SK01-5	11	粘土探査坑	-5	54.2	5.35E-03	21.9	5	9
SK14	7	土器焼成坑	-11.3	52.1	1.40E-03	4.2	207	10

第29表 北押川Cと御坊山遺跡の残留磁化の測定結果



第63図 文流消磁実験の結果。(上) 北押川C遺跡の遺構SK15、SK16の代表的試料の結果 (下) 御坊山遺跡の遺構SK01-1とSK14およびSK01-4・5の代表的結果を示している。

土師器焼成坑と考えられる。地磁気年代としてAD970年もしくはAD760年の年代が推定された。また同遺構出土の土器4点の残留磁化も測定したが、地磁気方向とはかけ離れており、遺構で加熱を受けた痕跡は無かった。焼土遺構の操業後に混入したものと思われる。

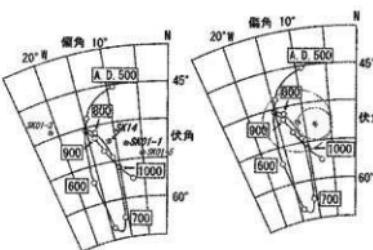
- (2) SK01-3では α_{95} 角度は38.1度と大きく、磁化のばらつきと弱い磁化強度から粘土探掘坑と考えられる。地磁気年代は強引にはAD850年程度と推定するが誤差は大きい。
- (3) SK01-4も α_{95} 角度は54.2度であり、磁化のばらつきと弱い磁化強度から粘土探掘坑と考えられる。地磁気年代は推定できない。
- (4) SK01-5は、 α_{95} 角度は21.9度であった。磁化のばらつきと弱い磁化強度からは粘土探掘坑で良いと考える。地磁気年代として強引にはAD1020年もしくはAD740年と推定するが誤差は大きい。効率は良くないが遺構操業当時の堆積残留磁化を獲得しているのかも知れない。
- (5) SK14は、 α_{95} 角度は4.2度と磁化方向は比較的まとまっており、地磁気年代としてAD930年またはAD780年が推定された。先述の様に、磁化強度は $1.4 \times 10^{-3} \text{ Am}^2/\text{kg}$ と焼土としては弱い磁化であり、現地調査の見解も併せると、被熱の影響の可能性はあっても弱い焼成と考えられる。土師器焼成坑を積極的に支持する結果ではない。

考古学研究では、SK01-1は上師器焼成坑でSK01-3～5は粘土探掘坑の用途が考えられた。磁化方向のまとまりと先述の磁化強度は、この見解を支持する。SK01-1ではAD970年もしくは760年の地磁気年代が推定されたが、考古学的な見地を参照すると、8世紀中頃から後半の可能性が高いと考えられる。またSK01の炭化材からC14補正年代はBP1,247年(AD710年頃)と得られており、C14年代との対比でも、こちらの可能性が高い。

SK14の上師器焼成坑の地磁気年代は、AD930年または780年と推測された。考古学的な見地を参照すると、8世紀後半の可能性が高いと考えられる。SK14の炭化材から、C14補正年代としてBP1,164年(AD790年)が推定されており良く一致する。



第64図 北押川IC遺跡(SK06, SK10, SK15, SK16)の残留磁化の平均方向を拡大シュミットネットに示し、北陸版地磁気変動と対比した。右の図には α_{95} の範囲も示した



第65図 遺構SK01-1とSK14の残留磁化の平均方向と北陸版地磁気変動との対比。右の図には α_{95} の範囲も示した。またSK01-3とSK01-5の平均方向も示している

F まとめ

北押川C遺跡と御坊山遺跡の焼土遺構では磁化方向はまとまり、地磁気年代の研究から操業の年代は、北押川C遺跡は8世紀中頃、御坊山遺跡は8世紀後半と推定された。また御坊山遺跡の重なった土坑では、磁化方向と磁化強度から土壤の焼成度を検討した結果、土師器焼成坑と粘土採掘坑が明確に判別された。

北押川C遺跡と御坊山遺跡、隣接する北押川B遺跡や向野池遺跡での調査から呉羽山丘陵の一帯に、製鉄（鉄製品の生産管理施設も複数存在）、製炭、製陶などを担う古代鍛冶場の一大生産拠点があったことがわかつた。考古地磁気年代推定は、遺物による調査研究を補完する研究として今後も活用が期待できる。

謝 辞

調査では、佐伯建設工業株式会社の高階茂氏には、関連資料などを紹介して頂いた。試料採取において富山大学の川中恵氏にご助力頂いた。以上の方々に感謝します。

参考文献

- Fisher, R.A. 1963 : Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.
- Hirooka, K. 1971 : Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. and Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 1997 「北陸における考古地磁気研究」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会編 桂書房 560-583.
- Kirschvink, J. L. 1980 : The least-squares line and plane and the analysis of palaeomagnetic data, Geophys. J.R. Astr. Soc., 62, 699-718.
- Sakai, H. and K. Hirooka 1986 : Archaeointensity determinations from western Japan, J. Geomag. Geoelectr., 38, 1323-1329.
- 酒井英男・山本雄治・菅原明口香・堀沢祐一 2006 「富山市向野池遺跡の焼土遺構の考古地磁気年代」『富山市埋蔵文化財報告18』富山市埋蔵文化財センター 110-116
- 酒井英男・松延礼佳・伊藤 考・野原大輔 2007 「砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定」『久泉遺跡発掘調査報告』砺波市教育委員会 215-223
- Zijderveld, J.D.A. 1967 : A.C. demagnetization of rocks-analysis of results, Methods in Paleomagnetism, edited by Collinson, D.W., Creer, K.M. and Runcorn, S.K., New York, Elsevier, 254-286.

第VII章 総括

第1節 調査成果の要約

今回の北押川C遺跡・御坊山遺跡の調査によって、境野新堀状地における古代の生産遺跡群として、それぞれの生産遺構の広がりや性格の一端を明らかにする成果が得られた。

A 北押川C遺跡

縄文時代と古代の複合遺跡である。南東方に延びる丘陵上に展開される縄文時代集落遺跡から北西に続く緩い傾斜を成す。調査では当該期の遺構は検出されなかったが、遺物包含層から前期後葉から中期初頭にかけての遺物が出土した。東側に隣接する2003年度調査において、丘陵の西向き斜面部に位置する単独で検出された住居跡は集落の末端部である可能性が高い（福山2003）とされたが、今回の成果はそのことを裏付ける結果となった。

また古代では、隣接区からの一連であると思われる焼壁土坑が4基検出された。南方の平坦部分に集中しており、斜面においてはややまばらに不規則な配置となっているようである（第65図参照）。

この他、推定井戸跡とした土坑が4基検出されたが、これらは隣接区の7基とはほぼ一本の線上に規則的に構築されていることが明らかとなった。これまでの調査研究から井戸、縄文期落し穴、中世落し穴などの説が浮上している。第3節で検討したい。

B 御坊山遺跡

御坊山遺跡は様相を異にする2ヶ所の調査となった。調査地は遺跡の北端にある。北地区は過去の試掘調査等から予想されていた範囲に古代の生産遺跡が確認され、2基の土師器焼成坑の他、多数の土坑が検出された。土坑の中には4基が直線状に並ぶものもあったが、明確な柱痕が確認できず、対辺の柱列が検出されなかつたため建物との判断は下さなかった。2基の土師器焼成坑についてはそれぞれ考古地磁気測定を行った。AD760年、AD780年（第IV章第4節参照）の8世紀後半代という焼業年代が得られた。遺構の形態からも、その時期に土師器の生産が行われていたと考えられる。焼業面に残された破片などから判断する限り、生産された土師器は煮炊具が際立つが、この中で完形の未使用品の灯明皿が1点出土した。

また南地区は自然流路となり、南西方斜面上から移動してきたと考えられる様々な古代遺物が不規則に出土した。詳細は第V章で触れているが、多量の土器片の中には墨書き器も含まれている。これらの遺物は完形や完形に近いものもあることから、この地で一括廃棄されたのではなく、流れ込んだものと考えられる。このなかで羽門の存在は、鍛冶作業が行われたことを、製錬溝（第VI章第1節参照）は製鉄作業が行われていたことを示している。

（吉川）

第2節 御坊山遺跡の土師器焼成坑について

A はじめに

富山県域の土師器焼成坑については、これまでに射水市小杉流通用地内遺跡群No.18A・Bの両遺跡で31基、また富山市南西部、射水丘陵東部には開ヶ丘中、開ヶ丘ヤシキダ、向野池、ガメ山の各遺跡で合計13基、この他に神通川以東の集落遺跡である任海官田遺跡からの2基が検出されている（森2007）。

今回2基の土師器焼成坑（SK01・14）が検出された御坊山遺跡は、境野新局状地に位置することから射水丘陵東部の遺跡群に含まれることになる。ここでは射水丘陵東部の古代における土師器焼成坑検出遺跡を概観しながら、今回検出された土師器焼成坑がこの地域においてどのような役割を果たしていたのかを検討してみたい。

B 射水丘陵東部の土師器焼成坑検出遺跡

①開ヶ丘中遺跡（富山市教育委員会2002a）

本遺跡の西方約800mに位置し、堅穴住居31棟、礎石建物1棟、掘立柱建物10棟という集落跡の中から土師器焼成坑が2基（SK01・22）検出されている。いずれも覆屋状に掘立柱建物が重複しており、共に9世紀後半とする年代頃から、土師器焼成坑と掘立柱建物が一対となる可能性が指摘されている。また遺跡の直近では須恵器窯は存在しておらず、同時期の須恵器窯としては西方約1.2kmに窄住池遺跡群があり、9世紀前半～末頃の操業とされている。

②開ヶ丘ヤシキダ遺跡（富山市教育委員会2003a）

開ヶ丘中遺跡の北方約200m弱に位置し、堅穴住居6棟、掘立柱建物8棟という集落跡や、生産跡として土師器焼成坑が4基、製炭土坑2基などが検出されている。このうち土師器焼成坑であるSK03は1間×1間の覆屋を伴っており、8世紀末～9世紀前半の時期が与えられている。植物圧痕がある焼成粘土塊の出土から、土師器を並べた上にワラをかぶせ、さらにその上に土を被せて覆い火井をつくっていたことがわかる。また、土師器を並べる際は、接地面を少なくするため、土師器片を焼き台として再利用していたことが判明している。

③ガメ山遺跡（富山市教育委員会2002b附録）

本遺跡の北西方約500mの境野新局状地に位置する。土師器焼成坑が1基検出されており、県域で主流を成す円形系プランではなく、造りのしっかりした三角形プランを呈するものである。出土遺物から9世紀第1四半期頃と考えられている。

④向野池遺跡（富山市教育委員会2002b）

本遺跡の東方約500mの境野新局状地に位置する。平成12年度調査においては掘立柱建物8棟、井戸2基、焼壁十坑4基、土師器焼成坑が4基検出され、これらの遺構群の時期は9世紀前半～10世紀初頭頃と考えられている。また平成13年度の補足調査では2基の土師器焼成坑が調査されているが、近接する須恵器窯はみられない。

C 御坊山遺跡検出の土師器焼成坑

今回、御坊山遺跡（北地区）から検出された2基の土坑（SK01・14）を土師器焼成坑と認定した。こ

これらは傾斜のほとんどない半坦面に構築されたものである。

土師器焼成坑は定義上、認定の必要条件は大まかに次の3つとされる（木立1997）。①掘り込んだだけの単純な土坑であること（それ以外の固定的な施設を持たない）。②土坑床面が赤色に焼けていること（壁面のみが赤色に焼けたものは除外する）。③炭・灰・赤色焼土の塊～粒が原位置で確認され、その土坑で直接火を使ったことが明確であること（2次堆積のものは除外する）。などである。今回調査の2基の土坑（SK01・14）はこれら必要条件を十分に満たしているとは言えないが、その主たる認定根拠を焼成不良（牛焼け）の土師器出土とした。また第16図10の土器にみられる二次焼成痕などは、開ヶ丘ヤシキダ遺跡（前出）等でも類例があり、破片の一部を焼き台等に転用したことを窺わせるもので、積極的な認定根拠になるものと考えられる（図版16-10参照）。

SK01について、検出時は比較的大型のほぼ円形を呈する土坑と認識していたが、調査経過とともに平面形が不整なものであることが判明した。これは掘り込みが浅いことに由来している。望月精司氏による形態分類（望月1997）によると、C II類に近似しよう。遺構全体に被熱痕はほとんどみられない。遺物は鍋などの煮炊具が多く、9世紀代のものが主体となるようである。またこれに切られる形で複数の土坑が検出され、少量の土師器の出土があった。これらSK01-2～6とした5基の土坑は、覆土や形態からは土師器焼成坑という印象がない。これらがSK01-1とした当初の土師器焼成坑とどのような関わりを持つのか無関係であるのか、それらの解析には考古学的調査においては不明確な点があるため、SK01-2～5について地磁気分析（磁化方向・磁化深度）による検証を行った（第Ⅷ章第4節参照）。その結果を援用すれば、SK01-2～5の4基については燃焼が明確には確認されず、焼成作業を目的としないものと思われる。何らかの関連性を考えるならば、用途としては粘土採掘が挙げられようが、にわかには判断としない。

SK14は底面が平坦な單一の土坑である。望月分類（望月前掲）によると、C I類に近似しよう。底面や壁面に明瞭な被熱痕はほとんどみられない。遺物は底面直上から土師器の鍋を中心とする煮炊具の他、完形の灯明皿が1点出土している。9世紀第3四半期の操業と思われる。

D 小結

今回の調査では、土師器焼成坑の周辺からは覆屋や灰原、土器の廃棄坑といった関連性のある痕跡が認められず、遺構内にも明確な被熱痕は認められなかった。望月分類A類焼成坑などの大量生産型の被熱痕は「数回の焼成では明瞭な焼土層を形成することは難しく、度重なる土器焼成が同じ場所で行われたことを物語る」（望月前掲）ことから、今回検出の2基については、操業の回数はごくわずかなものであり、大量生産を目的とするとは考えにくい。

2基の土師器焼成坑の平面形態に統一性がないことは、周辺の向野池・開ヶ丘中・開ヶ丘ヤシキダ遺跡等に共通する傾向もある。これは焼成作業にとって土坑の形態にさほど必然性がないことを示すもので、いずれも不整形に偏る傾向となる理由の一つと考えられる。それら周辺の遺跡（前掲）には土師器焼成坑に関連する施設等がいくつか検出され、ある一定の操業期間が想定されているのに対し、今回検出された2基についてはその様な関連遺構は確認されず、さらに明確な被熱痕が認められていない。また、調査区は北東には谷地形が間に迫り、南西は基盤層が露出するという狭い袋状の様な空間であり、遺構はさらに限られた部分に形成されている。

これらの状況から判断すれば、御坊山遺跡から検出された土師器焼成坑2基は、この地域の中にわずかに残存する狭い平坦面において、ごく一時的に焼成が行われた可能性が考えられる。

第3節 北押川C遺跡の推定井戸跡について

今回の調査で丘陵から谷へと落ち込む緩傾斜面に沿って、直線的に配列された推定井戸跡が4基検出された。

こうした推定井戸跡は平成13年度の調査（富山市教育委員会2003b）でも報告されており、図に見られるように長さ約50mの間に11基の土坑が所在している。推定井戸跡からは過去の調査も含め遺物は出土しておらず、年代を特定することは出来ない。平面規模は今年度の調査のものがやや小型となるが概ね近似した形態である。これらの推定井戸跡は13年度の調査において、南方約500mに位置する野下遺跡の類例（富山市教育委員会1985）から縄文時代の落し穴となる可能性を指摘しつつも、形状や湧水層まで掘削が及んでいることから素掘りの井戸跡として報告されている。

これに対し古川知明氏は列状配置や底面に逆茂木が配されない、縄文期とは異なる平面断面を持つ、といった点から縄文時代の落し穴とは様相が異なるとし、「越中婦負郡志」の記述や宮崎県内の類例などから戰国期の防御戦術を目的とした戦略的落し穴ではないかとしている（古川2005）。

こうした経緯を経て今回の調査では推定井戸跡のうちSK05・SK17の二つで土壤分析（珪藻分析）や放射性炭素年代などの理化学分析を併せて行った。土壤分析では遺構の性格を特定できるような結果は得られなかったものの、分析結果から井戸説は否定できるものと思われる。放射性炭素年代では曆年較正年代がそれぞれSK05でcalBP8,000-7934、SK17でcalBP10,714-10,582という結果が得られた。詳細は第VI章第1節を参照されたい。

こうした分析結果を踏まえれば、これらの土坑は縄文時代の落し穴と考えるのが妥当ではないだろうか。逆茂木の痕跡が見られない点については、古川氏が指摘しているように縄文時代の主な狩猟対象であると推定されるイノシシやニホンシカなどに対し、逆茂木を立てて獣を仕留める構造ではなく、前足か後足を落とすことで逃亡を阻止する目的を持っていたと思われる。だが遺構、及び遺跡の範囲内から上記の年代値に該当する縄文時代早期の遺物は見られず、同一年代に構築された列状配置の遺構として考えた場合、年代幅の大きさも問題となるだろう。また遺跡内からは中世の遺物も出土しているため、先述の古川氏の説も検討の余地があるといえる。

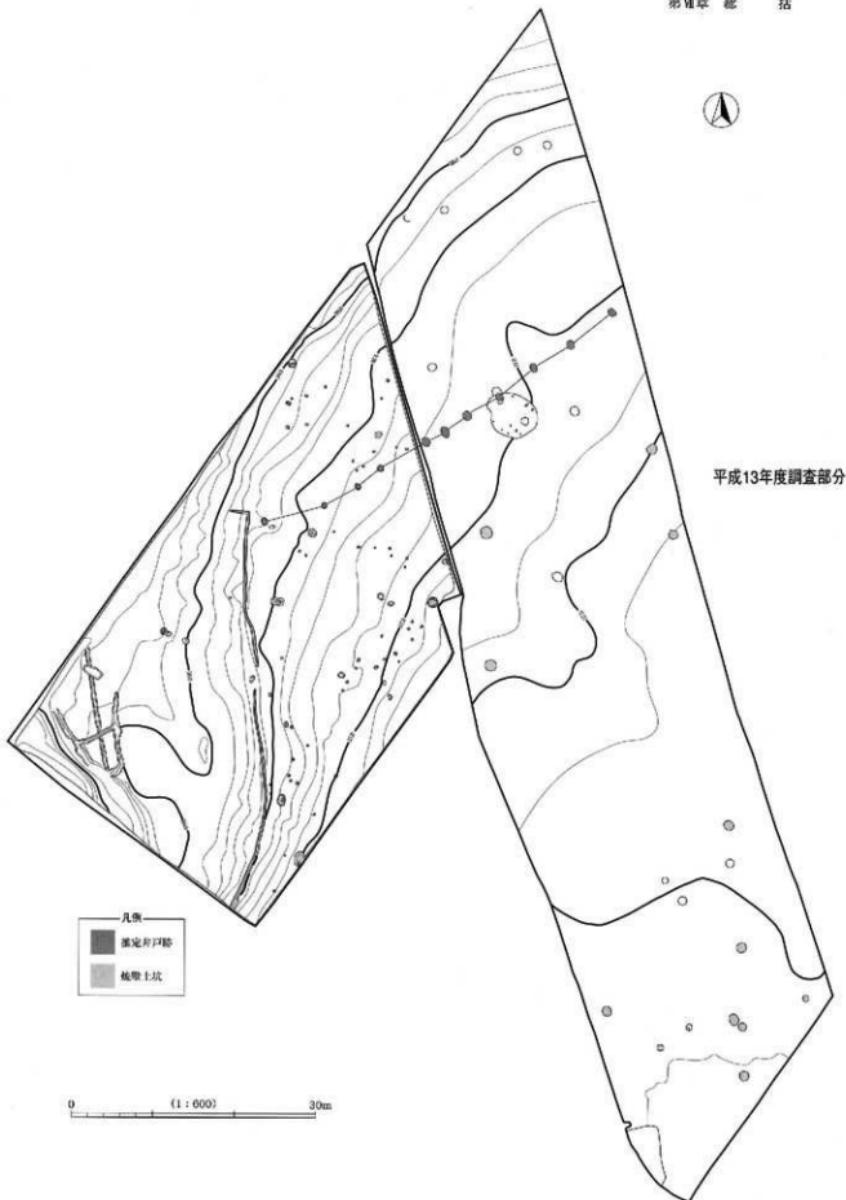
いずれにしろこうした解釈も推測の域を出るものではなく、今後の類例の増加待ち、更なる検討を加える必要があるだろう。

(渡邊)

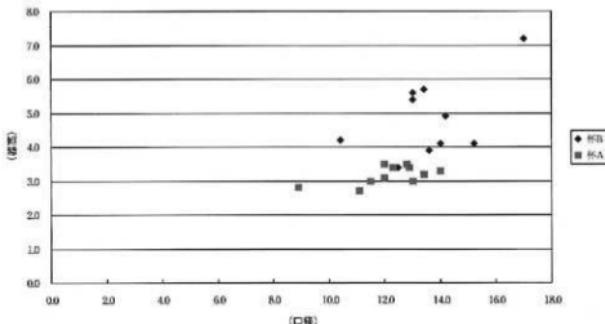
第4節 須恵器の様相からみた御坊山遺跡について

御坊山遺跡からは多量の古代遺物が出土した。このうち特に南地区からは流入したと思われる多量の須恵器が出土した。これらは地形からみてもその西側に広がる御坊山遺跡中心域からの遺物が流入してきたと考えるのが自然である。この御坊山遺跡南地区はそのほぼ全体が自然流路で、生産・消費と言った一般的な遺跡の様相とは異なる。ここでは年代感を比較的捉えやすい須恵器杯についてみることにする。

まず今回の御坊山遺跡出土の須恵器杯の口径と器高の比を第66図に示している。これらは口径・器高・底径が計測できるものを対象とした。その結果、杯Aは北地区のものが1点で他の12点は南地区的



第66図 推定井戸跡



第67図 須恵器杯の口径と器高

ものである。また杯Bは10点すべて南地区のものであることから、ほとんど南地区出土のデータでもあると言える。杯Aの主体は口径が12~13cm、器高が3~3.5cmである。杯Bの主体は口径が13~14cm、器高が3cm台後半~5cm台半ばである。杯Aはおおよそ一定の線上に納まるのに対し、杯Bはばらつきがみられる。杯Aの分布はおおまかに8世紀後半~9世紀代を示すと考えられるが、杯Bにみられるばらついた傾向は規格性の多様化を考慮した場合、大きな時間幅を示すものとは判断しがたいであろう。

そこでここでは関連が考えられるものとして御坊山遺跡の平成13年度調査（富山市教育委員会2002c）において出土した須恵器の杯身5点について比較してみる。底部の明らかなものは2点で、杯A1点、杯B1点で、他の3点は底部不明である。この中で口径・器高が明らかなものは杯A1点のみであり、口径・器高の計測値を持つものは4点である。口径は12cm、14cmが2点で、杯Bが口径13.6cm、器高3.6cmとなり、ほぼ今回の南地区出土須恵器杯に合致する。このことは調査地西方からの遺物が南地区に流入したことを見出す一つの要素と思われる。

さて、今回行った蛍光X線分析の結果から、御坊山遺跡の南北両地区における須恵器はそれぞれ別の産地から供給された可能性が指摘されている（第VI章第3節参照）。これは南北の2地区が別々に機能していたことを示唆している。従来考えられてきた御坊山遺跡（前掲）は、今回の南地区辺りにみられる自然流路等の地形によって分断されていると考えられる。

北東の向野池遺跡をこの地域の生産遺跡群の中核と考えた場合、北地区は生産遺跡の分布の一角落成す同じ性格を持つ遺跡の一つと考えられる。また南地区は本来の御坊山遺跡の北東端に位置する、いわゆる土器溝まり的な空間を形成したものと思われる。

(吉田)

参考・引用文献

- 池野正男 1988 「射水丘陵における9・10世紀の須恵器窯跡」『大境』第12号 富山考古学会
- 池野正男 1997 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 内田亜紀子 1997 「越中における古代土器の編年予察」『履歴文化財概要 平成8年度』財團法人富山县文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 木立雅則 1997 「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窑跡研究会編 真陽社
- 財團法人富山县文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1997 「埋蔵文化財概要 平成8年度」
- 財團法人富山县文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2002 「石名山木舟遺跡発掘調査報告書」
- 財團法人富山县文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2007 「佐渡宮出遺跡発掘調査報告書」
- 富山県埋蔵文化財センター 1991 「南中川D遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 1985 「野下遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 2000 「富山市内遺跡発掘調査概要 御坊山遺跡」
- 富山市教育委員会 2001 「富山市向野池遺跡発掘調査報告書 - (仮称) 富山西IC緑地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2001 「富山市開ヶ丘中山IV遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 2002 「堺野新遺跡・向野池遺跡」
- 富山市教育委員会 2002 「富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2002b 「富山市向野池遺跡発掘調査報告書 - 主要地方道新浜平岡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2002c 「富山市御坊山遺跡発掘調査報告書 - ふるさと農道整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2002d 「富山市柳谷南遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2003 「富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘孤谷遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書 - 県営畠地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)」
- 富山市教育委員会 2003b 「富山市北押川C遺跡発掘調査報告書 - 主要地方道新浜平岡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2006 「富山市向野池遺跡発掘調査報告書」
- 福山俊明 2003 「VIまとめ」『富山市北押川C遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 古川知明 1988 「越中における古代前半期の土師器」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」石川考古学会・北陸古代土器研究会
- 古川知明 2005 「落し穴状遺構の一解釈 - 一中世における畿略的落し穴」『大境』第25号 富山考古学会
- 望月精司 1997 「土師器焼成坑の分類」「古代の土師器生産と焼成遺構」窑跡研究会編 真陽社
- 森 隆 2007 「富山県の古代土器焼成窯」『富山考古学研究』紀要第10号 財團法人富山县文化振興財團

写真図版



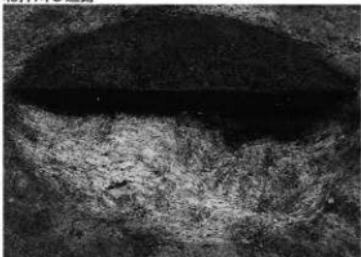
調査区全景



遺構露出状況（西から）

北押川C遺跡

図
版
2



SK01 セクション



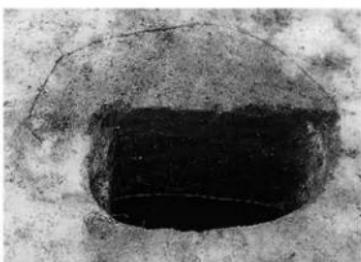
SK01



SK02 セクション



SK02



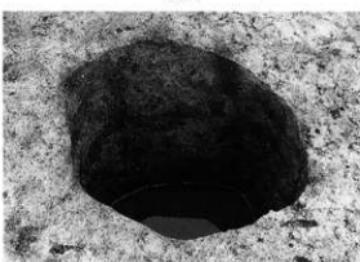
SK03 セクション



SK03



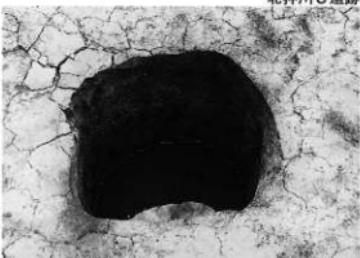
SK04 セクション



SK04



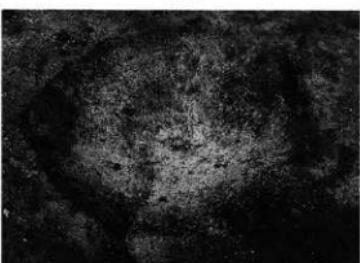
SK05 セクション



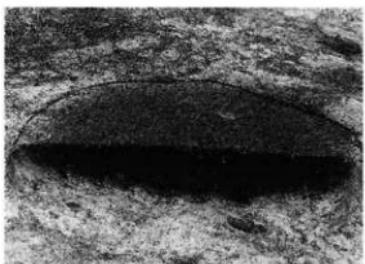
SK05



SK06 セクション



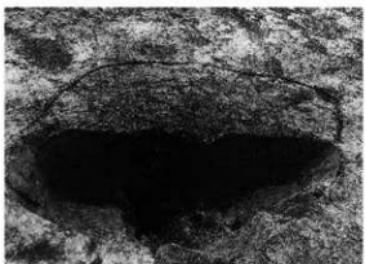
SK06



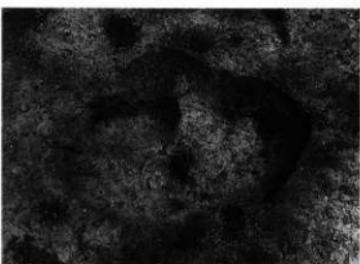
SK07 セクション



SK07



SK08 セクション



SK08

北押川C遺跡



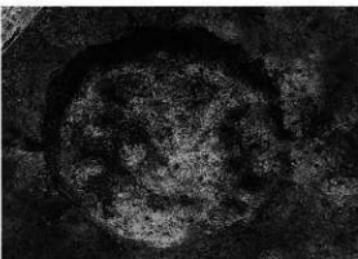
SK09 セクション



SK09



SK10 セクション



SK10



SK11・12



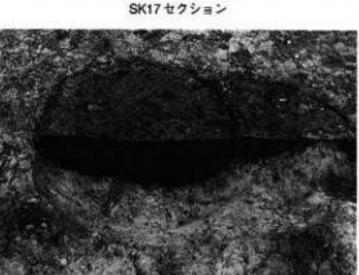
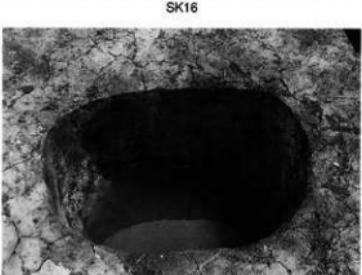
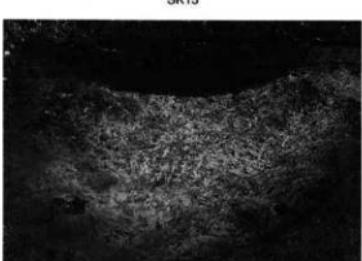
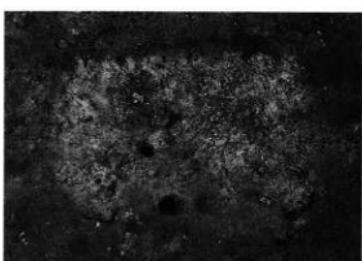
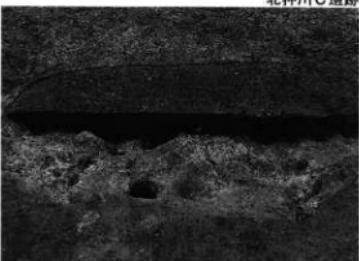
SK13 セクション



SK13



SK14 セクション



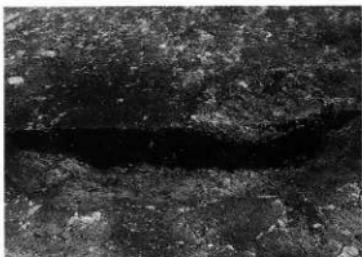
北押川C遺跡



SK19 セクション



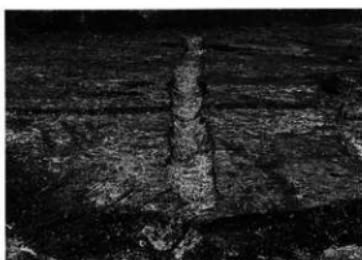
SK19



SK20 セクション



SK20



SD01



SK11・12 セクション



SX01・SD01 切り合い状況



テストピット(No.4)

御坊山遺跡（北地区）

図版
7



遺跡遠景（東から）

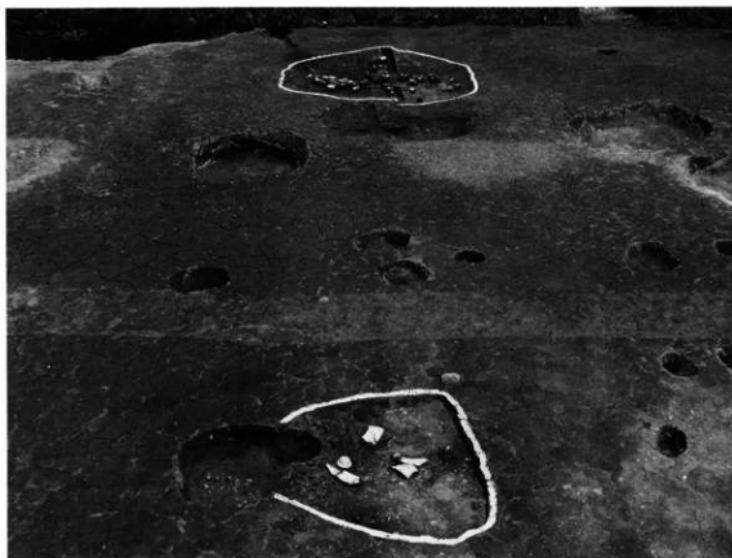


調査区全景

御坊山遺跡（北地区）



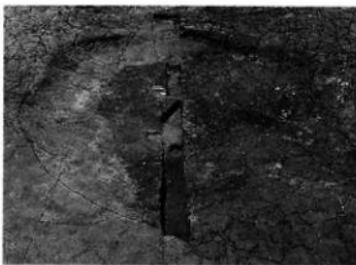
遺構検出状況



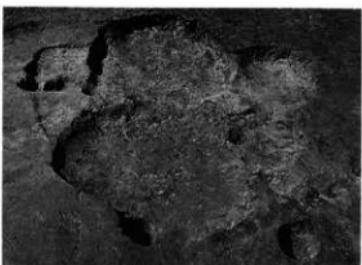
SK01・SK14近景



SK01 遺物出土状況



SK01-1・2



SK01-1～6



SK02 セクション

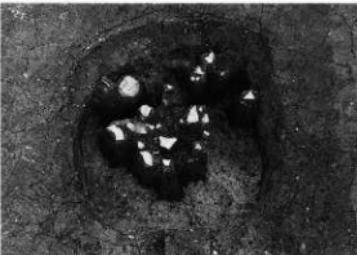


SK02

御坊山遺跡（北地区）



SK03 セクション



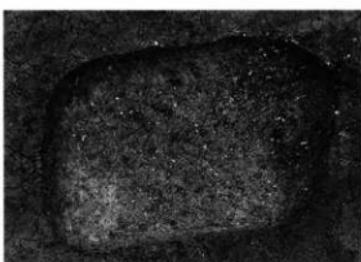
SK03 遺物出土状況



SK03



SK04 セクション



SK04



SK05・06 セクション



SK05・06



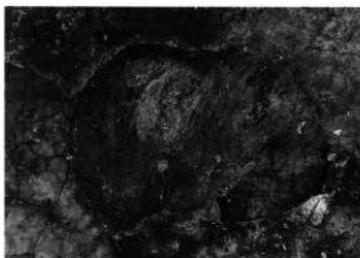
SK07 セクション



SK07



SK08 セクション



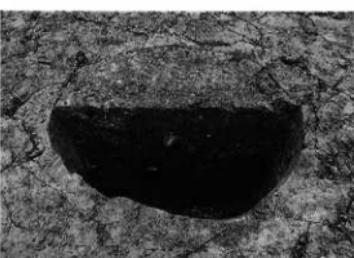
SK08



SK07 + 14 遺物出土状況



SK15



SK17 セクション



SK17



SK18 セクション

御坊山遺跡（北地区）

図
版
12



SK18



SK19 セクション



SK19



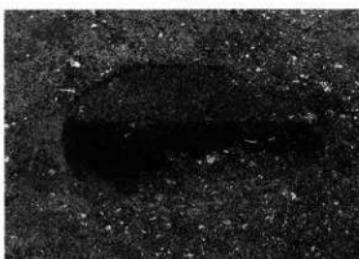
SK20 セクション



SK20



SK20 セクション



SK34



SK35 セクション



調査区全般



自然遺跡検出状況（南西から）

御坊山遺跡（南地区）



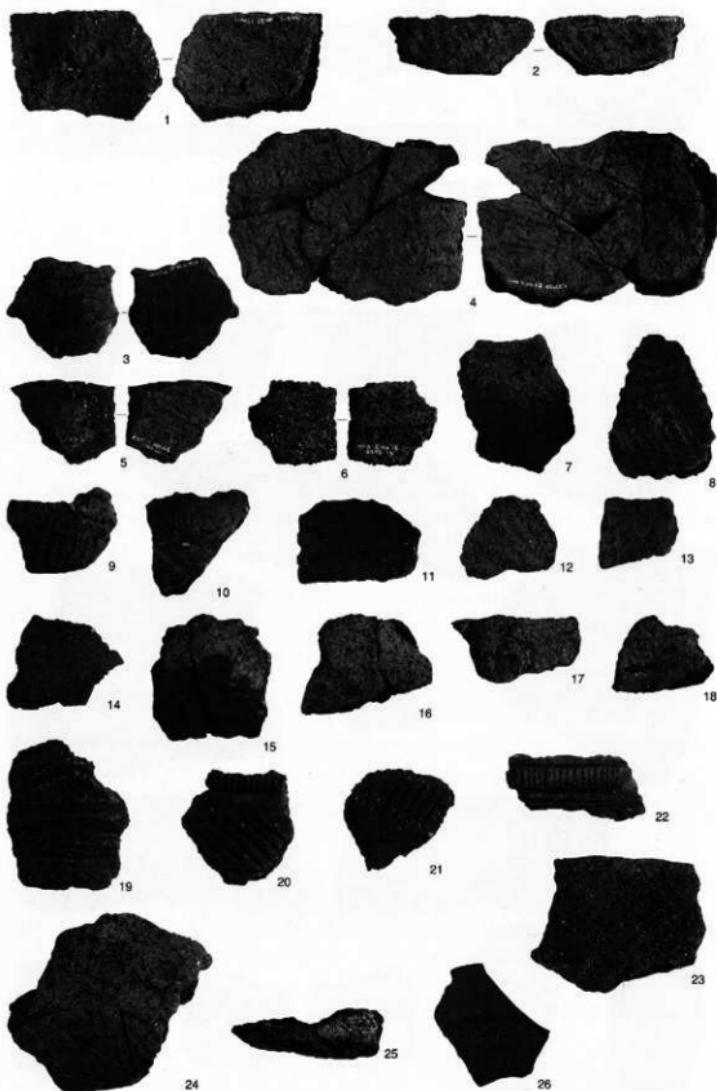
自然流路近景（北から）



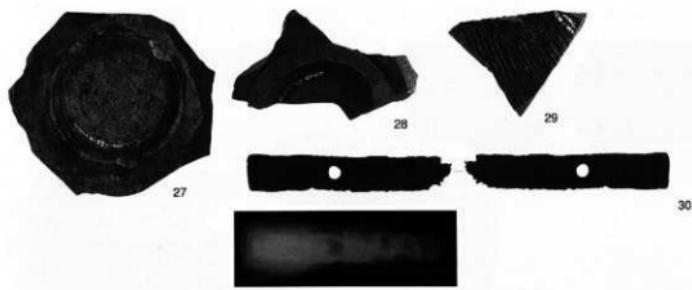
自然流路内遺物出土状況



自然流路内遺物出土状況



北押川C遺跡
図版 16

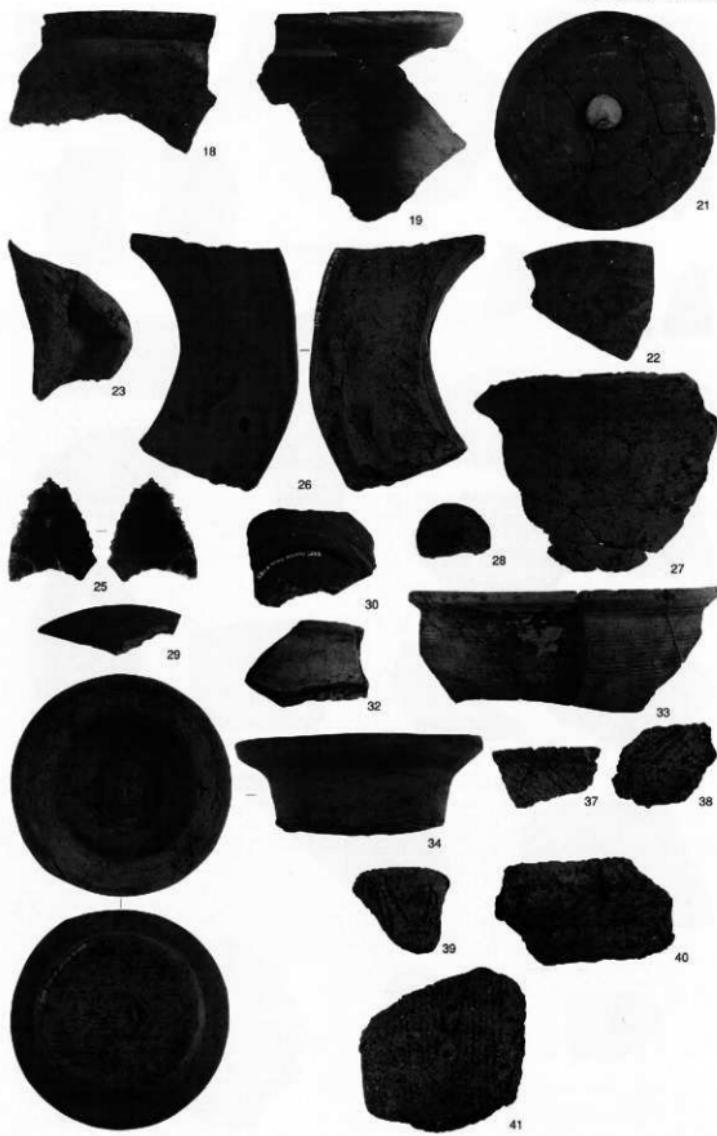


御坊山遺跡（北地区）

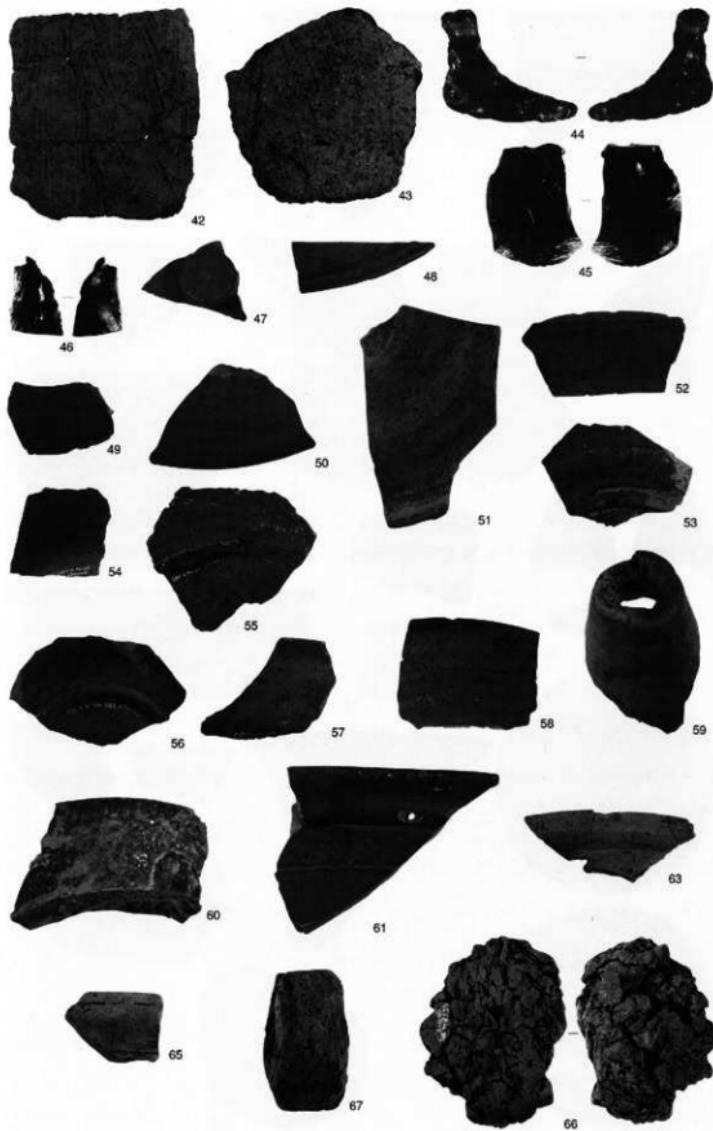


御坊山遺跡（北地区）

図版
17

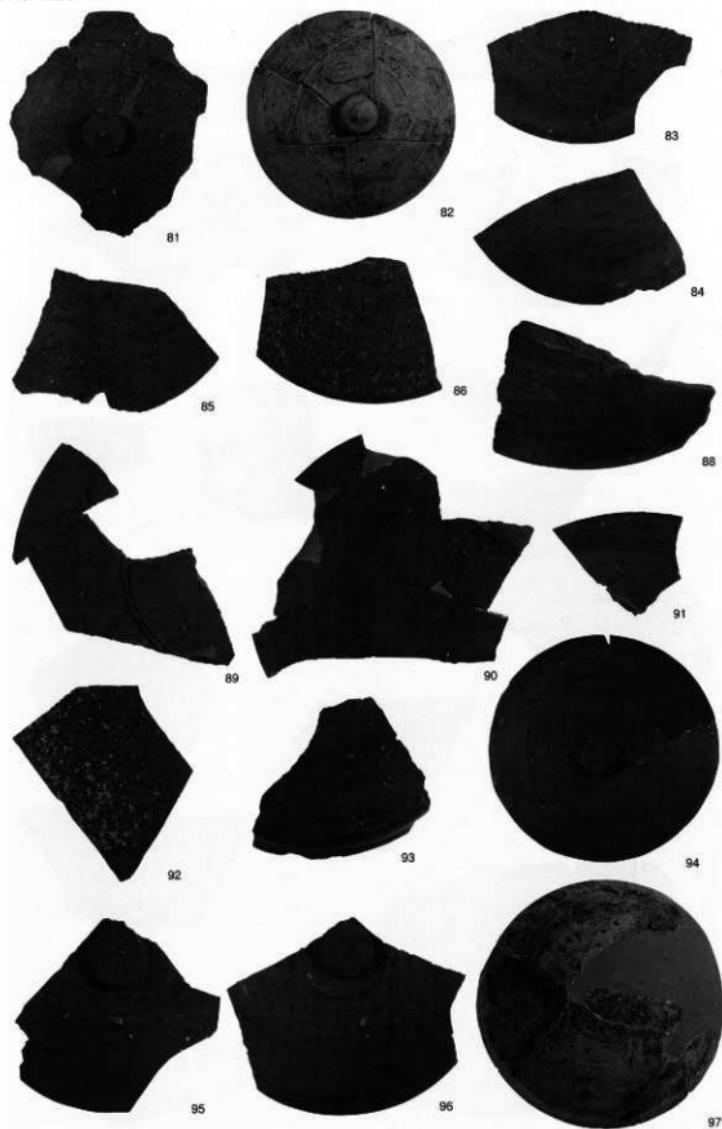


圖版
18



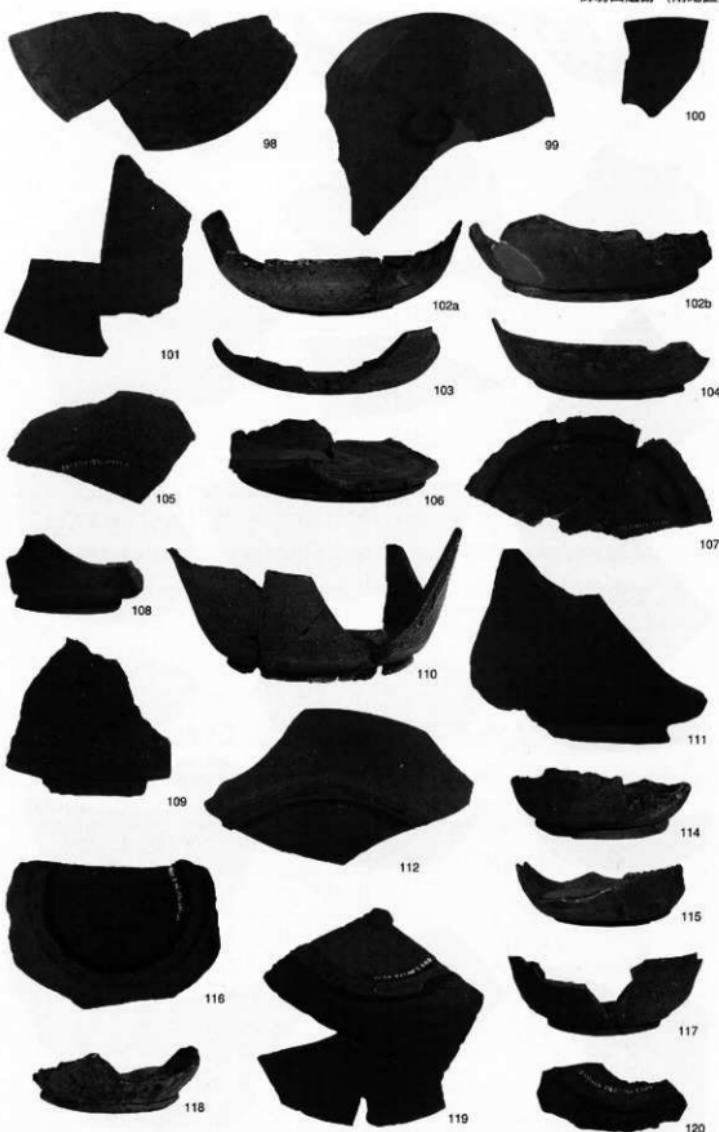


御坊山遺跡（南地区）
図版
20

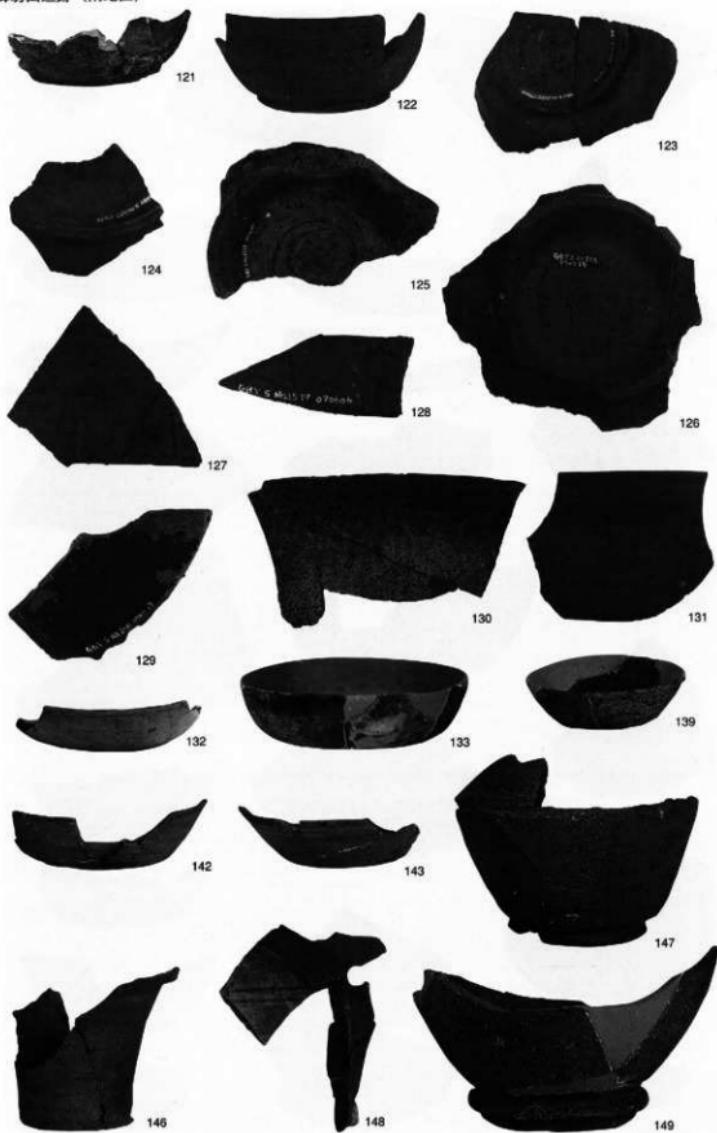


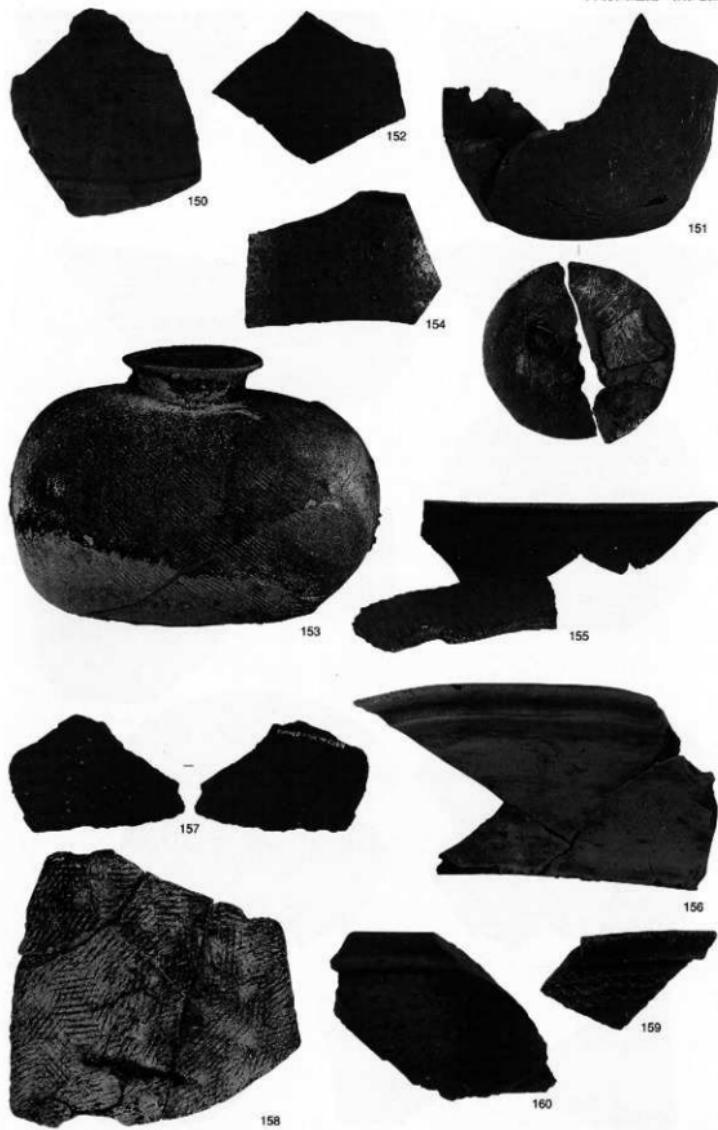
御坊山遺跡（南地区）

圖版
21



御坊山遺跡（南地区）





御坊山遺跡（南地区）
図版
24



161

163

164



165



166



168



169



166



170



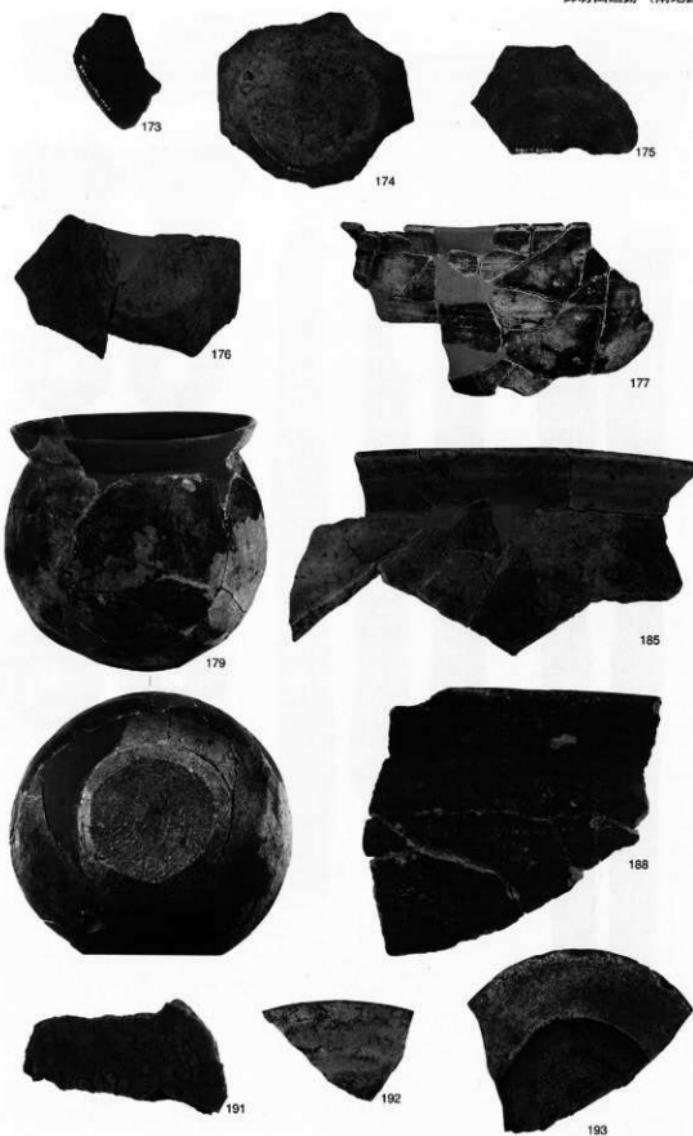
171



172

御坊山遺跡（南地区）

圖版
25



御坊山遺跡（南地区）

図版
26



195



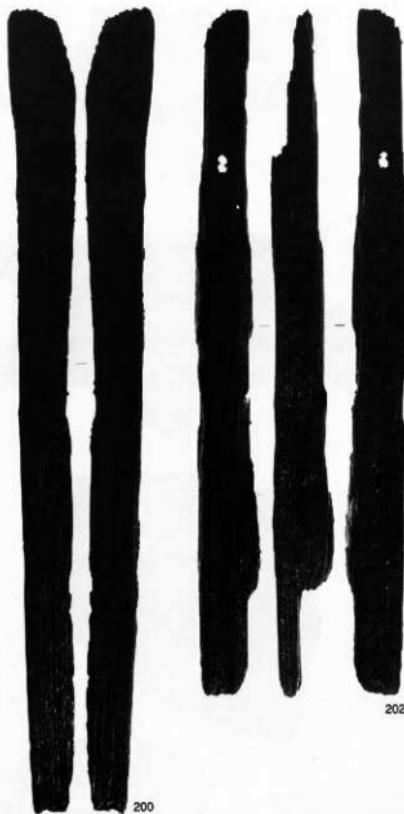
196



198



201



200

202



203



204



205

報告書抄録

ふりがな	とやましきたおしかわしーいせき・ごほうやまいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山市北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書							
副書名	呉羽南部企業団地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	27							
編著者名	吉田寿 渡邊大士 小黒智久 矢作龍二 伊藤吉永 草薙崇人 馬場健司 高橋敦 松元美由紀 斎藤紀行 石岡智武 下栗博俊 沙見真 三辻利一 泷井英男 山本豊 岩瀬明日香							
編集機関	佐伯建設工業株式会社北陸支店							
所在地	〒930-0018 富山県富山市千歳町一丁目6-18 TEL076-432-3366							
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0091 富山県富山市愛宕町一丁目2-24 TEL076-442-4246							
発行年月日	西暦2008(平成20)年3月14日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北押川C遺跡	富山県富山市	16201	466	38° 40° 35°	137° 07° 43°	2007.05.08 ~	2,286 m ²	呉羽南部企業団地 開発工事
御坊山遺跡	富山県富山市	16201	460	38° 40° 35°	137° 07° 33°	2007.05.08 ~	2,391 m ²	呉羽南部企業団地 開発工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
		縄文(前・中期)					上層、石器(石匙)	遺物包含層
北押川C遺跡	集落跡・ 生産跡	古代		推定井戸跡4基 上坑20基 溝1条		土師器、須恵器	焼壁土坑	
御坊山遺跡	集落跡・ 生産跡	古代		自然流路1ヶ所 土師器焼成坑2基 土坑52基	土師器、須恵器、墨書き 土器、鉢津、錢貨、木製品	自然流路には多量の古代 遺物が流入 土師器焼成坑を2基検出		
<p>北押川C遺跡は、縄文時代と古代の複合遺跡である。縄文時代は前期後葉から中期前葉にかけての遺物が出土し、集落の末端部分であることが確認された。古代は焼壁土坑4基など、上坑が計20基、溝が1条のほか、性格不明の遺構が1基検出された。遺物包含層から遺物が出土した。これらはいずれも平成13年度の調査成果に回収するものと思われ、推定井戸跡と仮称した4基の土坑は13年度調査区から検出された7基とほぼ一本の線上に規則的に構築されていることが明らかとなった。また、焼壁土坑は4基検出されたが、これらも13年度調査区において検出された12基の配置同様、散在的な傾向を示している。</p>								
<p>御坊山遺跡は、南北2ヶ所の調査区からそれぞれ多量の古代遺物が出土した。北地区からは上坑54基が検出され、この中には2基の土師器焼成坑が含まれている。南地区からは自然流路が検出され、南西方に広がる遺跡中心域から流入したと思われる多量の古代遺物が出土した。遺物は多岐にわたり、主体となる須恵器片、土師器片や製錬渣などの鉄滓の他に、墨書き土器、弥生土器、珠洲、中世土器片、近世陶磁器、羽口などの破片、木製品や鉄製品などが少數ながら出土した。</p>								
<p>古代の生産跡という性格を持つ北押川C遺跡・御坊山遺跡は、境野新羅状地上の製鉄・製炭・製陶遺跡群の中核遺跡と考えられている向野池遺跡との関係をもちながら展開した遺跡の一つと考えられる。</p>								

富山市埋蔵文化財調査報告27

富山市北押川C遺跡・御坊山遺跡 発掘調査報告書

—呉羽南部企業用地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)—

2008(平成20)年3月14日発行

編集 佐伯建設工業株式会社 北陸支店
〒939-0091 富山市千歳町一丁目6-18
電話 076-432-3366
FAX 076-432-3371

発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒939-0091 富山市愛宕町一丁目2-24
電話 076-442-4246
FAX 076-442-5810
E-mail maizoobunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 株式会社セビアス

